大洪水から 90 年、地域を守り続ける 旭 川 ダ ム

旭川ダムは、旭川水系旭川の中流となる岡山市北区建部町鶴田（左岸）・加賀郡吉備中央町神瀬地先（右岸）に、旭川河水統制事業の一環として建設された、堤高 45.0m 総貯水容量 5,738 万㎥、岡山県内 4 番目の規模の重力式コンクリートダムです。ダム地点の計画高水流量 4,700㎥ /s のうち 1,000㎥ /s の洪水調節を行って下流域の氾濫を防ぐほか、既得取水の安定化や河川環境の保全や岡山市等の上水道用水の開発、発電を行っています。

吉井川、高梁川とともに岡山三大河川の一つである旭川は、古代吉備王朝の時代から今日までこの地を支えてきた河川ですが、洪水被害が絶えず旭川の治水はこの地の治世で大きな課題となっていました。江戸期の記録では、承応 3 年（1654）の大洪水以後、30 余りを数えるほどで、昭和 9 年（1934）9 月 20 日から 21 日にかけて、関西一帯をを襲った室戸台風では明治 25，26 年以来の大災害となり、死傷者約 500 名、床上浸水家屋約 2 万 7 千戸という未曽有の被害をもたらしました。このときの水害を物語る記念碑が、旭川沿いの建部町に建てられています。

旭川の抜本的な洪水対策が求められ、昭和 17 年（1942）岡山県により旭川ダム建設が着手されますが、太平洋戦争の戦況悪化により事業は中断されました。戦後、復興の柱の一つとして、あらためて企業局により昭和 25 年度から建設着手となり、ようやく昭和 29 年度に完成を迎えました。

その後、昭和 47 年 7 月豪雨災害を経て、洪水調節も制限水位方式に変更されています。また、治水、利水面から再検討が行われ、昭和 53 年度から河川総合開発事業に着手となり、昭和 58 年度に完成しています。

近年は気候変動を踏まえて治水ダムとしての役割が重要度を増しており、今後のダム管理も更に細かな対応が求められます。

旭川ダム（堤高　45.0 m、堤頂長　212 m）

■位置図

旭川下流の対岸にバッチャープラント跡の下に再開発で建設された放流ゲート、左岸に旭川第一発電所がある。

ダム直下左岸に
旭川第 1 発電所

昭和 9 年室戸台風の災害
記念碑（建部町宮地）

昭和 47 年 7 月豪雨災害による被害状況（建部町大工）
（昭和 47 年 7 月豪雨災害誌より転載）